埼玉純真短期大学研究論文集　第９号　PP.66-74

「イエナプラン教育」研修報告

持　田　京　子
（こども学科　講師）

○研修内容について

2015年3月22日（月）～3月25日（金）5日間（内視察及び教員との話し合い2日間・3校及びイエナプラン教育の研修）

○研修企画者，コーディネーター

・リヒテルズ直子氏（九州大学博士課程修了・教育博士）

1996年よりオランダ在住し，「オランダ通信」でオランダの社会情勢，教育情勢を1999より発信・2007年よりイエナプラン教育のシンポジウムやワークショップを企画，実践される。「日本イエナプラン協会」の代表。・オランダの教育事情にかかわる著書多数。

○研修講師

・フレーク・フェルトハウズ（JAS共同代表者）

・ヒュバート・ウィンターズ（JAS共同代表者）

・リヒテルズ直子（教員資格ディプロマを取得）オランダ・エイル賞受賞

○参加理由

筆者は，オランダの子どもたちの幸福度が調査した国の中で1位だったこと，次にOECDのPISAの学力調査ではオランダが常にトップクラスであること，そしてオルタナティブ教育の一つである「イエナプラン教育」のシチズンシップ教育の考え方に以前から賛同していたことから，初回よりイエナプラン教育のシンポジウムやワークショップに参加しており，一度現地での教育実践を見学したり，イエナの先生方の話から学ばせて頂きたいと考えていたため，参加させて頂きました。

○参加者

教育コーディネーター，大学教員，中学教員，高校教員，小学校教員，大学生　計19名

1日目　　オランダ・イエナプラン教育の概要とビジョンについて（午前中）

図１

図２

・教えることとは何かを，ルソーの考え方や教育の歴史から辿って考えました。図１

・教師が良い教育をするためのイエナプラン教育の考え方を学び，話し合いました。図２

教師の役割は何か

子どもが自律的な学びや仕事をすることを目標として助け，そのために記録し，さらなる学びへとつなげることである。必要な学びの枠組みを子どもが自分で選択し，考えることを助けることである。

そのためのイエナプラン教育の考え方

１，ペーターゼンの教育思想について

（１）ネットワークづくりの大切さ

（２）教えることの意味を考える

2日目　　イエナプランＫＩＶＡ－ＳＣＨＯＯＬを見学（登校～下校まで）

図１

図２

昼食時は教員との懇談と意見交換

イエナプラン校の教員は日本と同様に大学で教員の資格を取った後，１年間イエナプラン校で研修をしたのち，教員の資格を取得できます。筆者が視察した学校は敷地内に他校もありました。オランダでは様々な教育方針の学校があり，自分で学校を選びます。（公立も私立も関係なく全て学費は無料で，支援を必要な子どもにはそれだけリュックサックに費用をサポートする，リュックサック政策が行われています）イエナプラン校では他校と体育館，校庭，図書館などは共有でしたので他校も見ることができました。

図３　図書館

図４　体育館（専門の体育コーチ）

○ブロックアワーの授業は，教師が予め知らせておいた時間に同じ内容の学ぶべきことを，おおよそ３回プレゼンをします。子どもは個々に合わせてプレゼンを聞き，課題を行います。既に分かっている子どもは学びや課題を広げたり，他に教えたり，次の課題に取り組みます。教師は２名いて，分からない所はいつでも質問でき，新しい課題をもらったり，子どもが教え合うことも自由です。教室はとても静かです。また，低学年の子どもは週の，高学年の子どもを指定して自分の教えてもらいたい教科を教えてもらう時間があります。

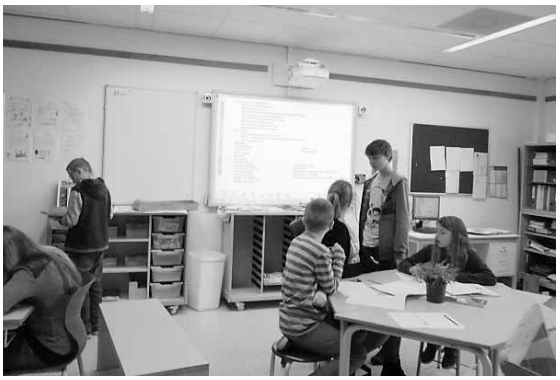

図５　中学年（５～６年生・日本で３～４年生）

図６　高学年（７～８年生・日本で５～６年生）

【幼児（低学年１～２年　日本で４～５歳）午前中で帰宅

○たくさんの道具がありそれらを使って自由に遊び，表現できます。（教室環境・図７～10）

図７

図８

図９

図 10

幼児の外遊び（写真 11～12）教師は見守りだけ，困ったら子どもが相談しにきていました。

図 11

図 12

図 13　ロッカールーム

図 14　副校長先生と

幼児たちは帰りの前のワールドオリエンテーションの時間に「春」についての話し合いをしていて，多くの意見が出ていました。

図 15

図16全ての教室がホールに通じていて，子どもたちは昼食時など，時間によっては学年を超えて一緒に過ごしたり，どこへでも行き来していました。

図17いじめについて臨床心理士の講師から学ぶ。実際に椅子を使い「いじめ」の役割を考えている。

図 16

図 17

研修３日目

１，イエナプラン校の考え方について―教室がリビングルームである

（１）縦割りの学習

○縦割り学年ですごすこと

①年上の子どもは年下の子どもを見ることで自分の気持ちを再認識することが出来る。（かつて経験したことがあるから）そして年下の子どもが分かる。
②年上の子どもは大人との間に入っての中間的な役割が出来る。
③子ども同士の学習が可能になる。
④互いに失敗を許すことが出来る。

（２）ブロックアワー

○対話・遊び・仕事を通してできることを考える
①個人の計画と全体の計画を考える。
②ＭＡＳＵＴとＭＡＹを知る。
③間違えから学ぶ。
④評価について。

（３）サークル活動（対話）を通して
①自分の為に，誰かのためにの両方を学ぶことが出来る。
②先生が引っ張るのではなく，自分で考えることを学ぶ。
③わくわくすることを覚える。

２，ポートフォリオの重要性について学びました。
午後の一部は，ワークショップとしてサークル活動をしました。

研修４日目

イエナプラン校のエッセンシャル
１，行動に移す
２，企画することが出来る
３，協同することが出来る
４，考えだけでなく，結果を出す
５，発表することが出来る
６，振り返ることが出来る
７，責任を持つことが出来る

ランニングストーリー及びまとめとイエナプラン校現在の研修生のプレゼンテーション
リヒテルズ直子先生と講師のフレーク先生ヒュバート先生（図18～20）

図 18

図 19

図 20

研修４日目

「ヤンセンの自転車」の考え方より，イエナプランの20の原則を再確認しました。

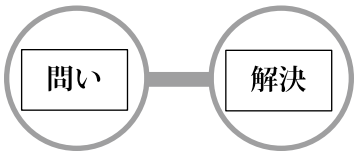

図 21（イエナプラン校では，教師は答えを探すことを教える）

その考え方は，問い－解決の両輪の中で，先生が刺激し，導き，子どもたち自身が考えるために何をしたらよいか，子どもが自分で解決していくには何が必要なのかを追い求めることです。また，サークルの中で互いに「問う」そして互いに「解決」を探ることが大切ということでもあり，そこでは教師が質問を恐れてはならないこと，質問を集めることが重要であることが分りました。そして教師は何をどう教えるのかを常に考えるべきことの必要性が分かりました。教師は「教育は教える」という意識から離れることがまず必要で，教育は学びの背景であり，終わりがないという意識の大切さを実感しました。

また，ワークショップで「ラーニングストリー」をすることで，子ども理解について互いに話し合ったり，その使い方の面白さや有効性を知ることが出来ました。更にイエナプラン校で教師となる為の研修実習の先生方のプレゼンテーションを聞き，ポートフォリオなどを見せて頂く中で，イエナプラン校の教育実践を理解することが出来ました。また更に先生方と懇談することで，そのビジョンに触れ，日本の教育との差も見え，わが国の教育格差について改めて考えさせられました。グループ発表の後，研修旅行参加者は研修修了証を頂きました。

研修５日目　イエナプラン校視察

図 22　学校玄関

図 23　校庭

この学校では案内を希望した５年生の児童たちが待っていてくれて，全ての場所を英語で案内してくれました。これも授業の学びの一貫です。上級クラスの児童たちのほとんどが日常会話の英語が出来ます。またこの学校では全てのクラスに，ロフトがあり，ロフトは隠れ家のようであり，また玩具や漫画などが置いてあり家庭のようでした。

【幼児クラス】

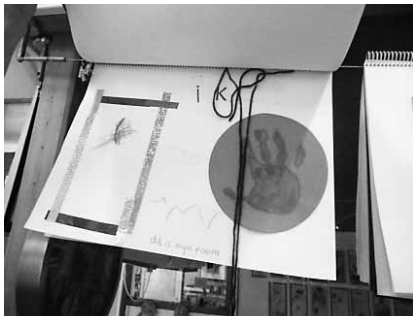

図 24 （ポートフォリオ）

図 25 （ポートフォリオ）

図 26　遊びコーナー

図 27 保育室の階段がロフトへ

この学校では毎日，父兄の有志が給食を作りに来ています。この日のメニューのシチュウとパンなどを頂いたのですが，とてもおいしかったです。イエナプラン校に入れた理由は「子どもが自由に選んで勉強できること」「先生方が，暖かく子どもを導いてくれる」など，イエナ校を誇りにしていることが良くわかりました。

図 28　5～6 年生（日本では 3，4 年生）

図 29　7～8 年生　　自分で考えて調べる

図 30　3～4 年生（日本では 1，2 年生）

図 31　パソコンの解体をする

小学生は自分で調べたり考えたり静かに過ごしていました。また質問をする子どもが多く，自分が分らないことを理解していると見えました。

図 39　アイパット（授業の発表確認できる）

図 40　ロフトで勉強している 6 年生

まとめ

オランダの教育は太田和敬(2010)が述べているように，その原則が[教育の自由]にある。
現在，オランダではオルタナティブ教育が実施されており，多様な教育的理念や方法を実現することが保障されている。そこでは，「シュタイナー学校」「モンテッソーリ学校」「フレネ学校」「イエナプラン学校」などの多くの教育理念を持った学校があり，「公教育」のもとに一つの形態の教育で統一されているのではない。実際に教育が「教育する」という権利のもとだけで教えるのではなく，「教育する」ことと「親が教育を選択する権利」との両輪から成り立っているのである。そこで注目すべき点としては，それらが公立，私立，関係なく全てが豊かな教育が経済的にも実質的にも保障されているということである。今回の研修に参加して，イエナプラン教育の豊かな教育環境からそれらのことを実感することが出来た。

イエナプラン教育学校では児童自身が「何のために学校へ行くか」ということをしっかりと認識しており，日本のように「何となく行く」という考え方はない。「自分の将来設計をするために行く」ことをどの子どもも考えており，その子どもの思いを教師も含めて友達，親も互いに認め合い援助している。同じグループでイエナプラン校の教員たちと懇談した際，参加したある教員が「親なら誰でも良い大学に行き，良い就職をしてお金を稼いでほしいと思うのでは？」と伺ったが，イエナプラン校の先生方は即座に「では水道工事をする人がいなくなってもいいのですか？それは尊い仕事だと私は思うし，教師は様々な立場からその大切さや尊さを教えなければならないと思います。」と答えられていた。子どもの育て方の根本から民主主義的な考え方が浸透していることを改めて認識することが出来た。

イエナプラン校の幼児学校(1～2年生)について言及するには，まずオランダの幼児教育の考え方の基本を考えなくてはならない。オランダの幼児教育の基本は「ピラミッドメソッド」である。（オランダ政府教育評価機構CITOによって開発1999に民営化）された。この考え方は[自分で選択して決断できる力を養うこと]に重点を置いてあり，これらの考え方は我が国と同じではあるが，大きな違いはオランダでは[親に子どもを返す]という考え方が浸透しており，幼い子どもは親の元にいるのが一番幸せだ，という考えのもとで幼児教育がなされている。そして国自体も残業ゼロをめざし，子育てで働いている母親は早く帰ることをせかされる。また，正規もパートも同じように保障されるので，とくに正規に親がしがみつく必要はなく，ゆっくりと子育てが出来る。さらに考え方の違いとして，大学の格差がない国なので，受験などとは程遠く子どもが自分に一番向いている仕事を探すために学校へ行くのである。しかしPISA（OECD生徒の学習到達度調査）では日本と大きな隔たりはないのは，驚きである。

このような中，イエナプラン校では，縦割りの，ゆったりとした時間の中で，次第に世界に開かれた客観的な子どもの考え方を培っている。教師たちも本当にのんびりと座り，歓談していて(そうだからこそ，しっかりと子どもの様子を見て記録することができるのだろう)教室が本当に家庭のリビングルームのようであった。また，どの子どもも「参加」することが出来るプラン作りをしていて，やるべき枠組みを選択する自由があった。このように我が国の幼児教育では足りない，子どもが自ら参加する権利，大人が押し付けない教育，即ちユニセフの「子供の参加する権利」が根底にあるといえ，イエナプラン学校ではそのことをより意識して実践していると考えられ，だからこそ学ぶ意識が高まるのであろう。

また，イエナプラン幼児学校では[ワールドオリエンテーション]という時間で，互いに話し合い，認め合い，外の世界を考えて創る授業を行っていた(どちらかといえば，ガードナーの考え方を用いているプロジェクトゼロにも近い)。その中で次第に客観的に外へと目を向けることを学んでいた。現在の我が国の幼児教育では自分の園の内側に目を向けがちであるが，イエナプラン校ではもっと広い目で子どもを育てよう，自立させようとしていると感じられた。子どもたちの作った作品のポートフォリオを説明して頂く中

でも，子どもに寄り添いながらも，個々の自立へ向かってしっかりとしたビジョンを持たれている先生方の熱意が伝わった。また，昼食を作りに来ていた保護者に話を伺ったときに，イエナプラン教育の教師と保護者とは共同者であり，互いの立場を認め合っていることもよく伝わってきた。そして自分が選んだ学校を誇りに思い，学校づくりに参加していて，小さな子どもたちも同様に共同者であり，学校を誇りに思っているのである。そして，教員も全ての子ども一人ひとりを誇りに思っている。

無論イエナプラン校にも様々な問題がありいじめもあるという。ただそれらはあって当たり前のことと認め，隠すことなく，どうやって子どもたちが乗り越えられるのか，教師の役割をよく考え，教師同士で連携し考察していると感じた。今回参加して世界には様々な国があり学校がある。我が国の公教育や教師も広い世界に目を向け，もう一度自分の学校づくりをそれぞれが自覚する必要性が見えた。

研修を通してフレーク先生, ヒュバート先生, イエナプラン校の先生方, 子どもたち, リヒテルズ直子さん, まり子さんには大変お世話になり多くの学びを頂くことができた。また，リヒテルズさんとオランダ語通訳のまりこさんと３人で同じコテージで生活をして，多くの励ましやメッセージを頂いた。今後，自ら多くの学ぶ機会を作り，常に幼児教育，学校のあり方を考える気持ちを忘れないよう努力していきたいと改めて考えさせられた。

（文責・持田京子）